Case Study

言葉にする力を育む高校事例

生徒たちが自分の内面と向き合うことで、「私だけの言葉」を見つけ出し、言語化する授業を教科や探究で実践している学校の取組を紹介します。

日本語科で「私の言葉」を探す

教員が生徒と徹底的に向き合い「自分の言葉で自分を語る」力を追求

自由の森学園 中学校・高校（埼玉・私立）

国語ではない「日本語」科で自分の言葉を見つけていく

点数序列主義に迎合せず、一人ひとりのかけがえのない「個」を大切にする教育を目指して設立された自由の森学園。1985年の創立当初から、暗記重視ではなく対話により考える授業を実施し、評価は点数ではなく教員の記述、学びの成果はテストではなく作品やレポートで表現する教育を実践している。

「本校で生徒に得てほしいのは点数ではなく、自分の立ち位置を見つけることです。学校とは、今自分はどこに立っていて、どこを目指していくかを探る場所というのが本校の考え方です」（中学校教頭 日本語科・山口大貴先生）

生徒はすべての教科で徹底的に自分と向き合い、それを言葉にする学びを体験している。「日本語」科は、その基礎を担う教科だ。

1991年以来、「国語」科とは呼ばず、国とは切り離して「自分たちの言葉」とし、さまざまな文章を通して自己を考える教科として「日本語」科と呼んでいる。教科目標は「自分の言葉で自分を語る～言葉による自己表現の追求」。市販の教科書や文科省の指導書に頼りきらず、授業を通して生徒が本質的に自分を問うように、教員チームで教材選びから授業の組み立てまで行っている。

「自分を語る」とは自分の考えを文章化していく作業だが、まずは文学作品や評論、古典など自分の外にあるものごと、さらにはそれらに対する他者の意見の受信が必要だ。他者の考えを受信するときにどのような力が自分に働くかを感じ取り、受信したものを一旦壊してみて再構築することで、「自分」を見つけていく。そのため、「書く」「話す」だけでなく、「読む」「聞く」も同様に重視している。

生徒一人ひとりと教員が1対1で徹底的に向き合う

日本語科の授業では、単元ごとに自分の考えを文章化した作品を作ることをゴールとしている。そこに至るまでは、まず単元ごとに教材を深く読み込み、内容について議論したり仲間と対話することから始まる。そこから生まれた自分の考えを文章にして提出。最初は下書きで、先生から意見をもらい、ブラッシュアップしていく。

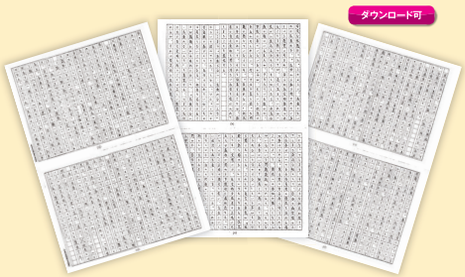
「『自分の言葉で自分を語る』とは、思い込みで書くのではなく、他者に伝わ

自由の森学園中学校・高校の自分について言語化するためのツール

●単元ごとの作品集

単元ごとに自分の考えを文章にした作品を、クラスごとに冊子にまとめた作品集。表紙は生徒たちがイラストを描いて作成する場合もある。

ダウンロード可



原稿用紙にびっしりと綴られた生徒たちの文章。単元のテーマに対する自分の考え、そこから見出した自身の内なる思い、今後どう生きていきたいかなどが表現されている。

取材・文／長島佳子

ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス（Vol.448）

り、心に響く言葉になっているかが重要です」（山口先生）

「この表現で本当に自分の言いたいことが語れているのか」「この主述はずれていないか」「この視点は面白い」など、検討すべき点と良い点の双方について先生と個々の生徒の1対1のやりとりで行われている。手間はかかるが、先生と一緒に生徒がじっくり自身と向き合うことで、最初は自分の意見をうまく外に出せなかったり、文章化できなかったりした生徒たちが、自信をもって自分を表現できるようになっていく。

最終的に完成した文章はクラスごとに作品集として冊子化し、全員で共有。ほかの生徒の考えやまとめ方から刺激を受け、「次は自分もこのように書けるようになりたい」という原動力になる。

世の中に迎合せず たくましく個性を発揮する

単元ごとに作品集を作るサイクルを繰り返すことで、自分について考え表現する精度が高まり、自己のあり方を生徒たちは見つけていく。こうした教育の結果、他者に心のありかを委ねず自立した個をもち、表現力が豊かな生徒たちが育っている。

「ただ、卒業した直後は、本校と世の中のギャップに生きづらさを感じている卒業生もいます。実際の世の中は、徹底的に向き合ってくれる大人が少なかったり、他者の流れに合わせれば良いという感覚の方が多いからです」（日本語科・土方真知先生）

しかし、前述のように読む力や受信力を磨いてきた卒業生たちは、世の中を読み込み、見極める力も身についている。

「卒業して2年目くらいになると前向きに諦めるようです。与えられた環境のなかで、世の中の流れにのるのではなく、そこで自分に何ができるかを考えて行動していく。自然にたくましく成長していく卒業生が多いですね」（土方先生）

生徒の変化とともに 教員にも変化が必要

先生たちが近年課題と感じているのは、文章を添削されると自分を否定されていると感じる生徒や、教員受けするような答えを出そうとする生徒が増加傾向にあることだ。こうした生徒たちに、可能性を閉じさせず、自分と向き合うことの意味を伝える方法を模索するために、授業や生徒への向き合い方も変わってきたという。

「教育目標は同じでも、昔は個々の教員がストイックに独自の授業スタイルを貫いていることが多かったです。今は若手もベテランも共に教科横断で、教員チームとして取り組んでいます。チームならお互いのノウハウを生かすことができ、若手から学ぶことも多いです。あらゆる人から学ぼうとする姿勢や、いろいろな方法を試そうとする若手のフレキシブルさには圧倒されます。その柔軟な対応力が、厚い生徒の殻を、無理矢理ではなく破っていけているように感じます」（山口先生）

同校の点数序列に迎合しない教育について「自由の森学園だからできる」と他校から言われることも多い。

「本校の取組がすべてとは思っていません。他校の先生たちともっと交流して、生徒が自分のあり方を見つけられる教育について一緒に学び合えたらいいですね」（土方先生）

写真左から、中学校教頭 日本語科・山口大貴先生、日本語科・土方真知先生

日本語科の学習サイクル

単元について
単元は説明文や古文など通常の国語科に含まれる内容を網羅しつつ、文学作品の授業を重視している。

クラスで議論
単元の教材本文を読み込み、クラスで議論したり、仲間と対話したりすることで、内容への理解を深める。

自分の考えを文章化
教材の内容を理解したうえで、そこから自分が感じたこと、考えたことについて文章で表現していく。

先生に意見をもらう
書いた文章について、語り切れていないこと、独特な視点で書けていることなど、一人ひとり個別に先生から意見をもらう。

ブラッシュアップして完成
納得のいく文章になるまで自分と向き合い、先生とのやりとりを繰り返し、文章を完成。クラスで作品集を作る。

友達の作品を読む
完成した文章を作品集としてクラスでまとめた段階で、仲間の作品について寸評を書き合う。人の作品からの刺激が成長の原動力となる。

次の単元へ
作品集が完成すると次の単元へ。このサイクルを全単元で繰り返していく。

学校データ
1985年創立／全日制課程普通科。「人間の自立と自由への教育を追求する深い知性・高い表現・等身大の体験」を教育理念に、点数序列主義に迎合しない独特の教育を進める。高校では100以上の選択講座を用意し、一人ひとりの生き方に結びつけていく学びの環境を提供している。